metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by
provided by Hiroshima University Institutional R

教育研究」第五十八号（平成二十九年三月刊）

U理論から考える深い学び

――日台共通小学校説明文実践を通して――

難波博孝

1．日本における教育改革の動向

2016年現在、日本において進行している教育改革は、小学校入学までを巻き込んだ大きな改革である。その中で、小学校・中学校・高等学校に関わる教育改革は、大きく分けて次の二つである。一つは、目標の改革であり、もう一つは、方法の改革である。目標の改革は、従来の①知識・技能に加えて、②思考力・判断・表現力③学びに向かう力・人間性　を含めた三本柱を「資質・能力」ととらえ、どの教科領域もこの三本柱で目標をたてようとしているものである。

方法の改革は、アクティブ・ラーニングという言葉で代表されるような方法をとることであり、具体的には「A主体的　B対話的　C深い」学びを起こすような方法を授業で行うことが求められている。

2．深い学びとは何か

本論考で焦点を当てたいのは、このABCの中の、「C深い学び」である。つまり、深い学びを起こす方法とは何か、ということである。

日本の文部科学省は、「深い学び」とは、「教科等の特質に応じ育まれる見方・考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解や資質・能力の育成、学習への動機付け等につなげる学びのこと」としている（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/061/siryo/attach/1373869.htm）。

しかし、この定義をみても、「学習内容の深い理解」という語句が入っていたり、「学習内容の理解」「資質・能力の育成」「学習への動機付け」と多岐にわたることにつながる学びであるとしたりしており、大変わかりにくくなっている。

アクティブ・ラーニングを導入することで、「主体的」「対話的」

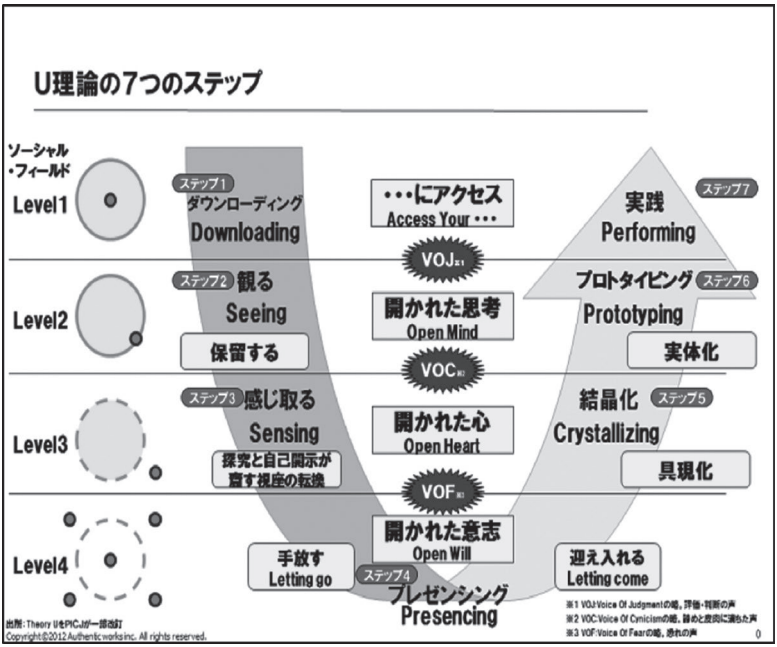
な学びになっていたとしても、浅い学びになるのではないかという不安を多くの人々はもっている。その不安を払拭するために文部科学省は、アクティブ・ラーニングの要素の中に、深い学びを入れたのだが、そもそも、アクティブ・ラーニング自体に「深い学び」の意味はなく、むりに付けた感は否めない。そこから、「ディープアクティブ・ラーニング」という奇妙な言葉も生まれてきている。その言葉からも、アクティブ・ラーニングには「深い学び」という意味が含まれていないことがわかる。

では、「深い学び」とは何なのか、改めて考えてみたい。文部科学省の定義をふまえれば「学習内容の深い理解」とは何なのか、「学習内容の理解」と何が違うのか、ということである。

3. U理論の援用

「深い学び」を考えるために、私はU理論を援用したいと考えている。

U理論とは次の図で示されるものである。



（引用は、http://cybozushiki.cybozu.co.jp/articles/m000376.html による）

中土井（2014）（p.161）

U理論とは、MITのC. Otto Scharmerが提唱した、個人と組織両方に関する、イノベーションの理論のことである。また、この理論は、「過去の延長線上にない変容やイノベーションを個人、ペア、チーム、組織やコミュニティ、そして社会で起こすための原理と実践手法を明示した理論（中土井2014 p.1）」である。現在私は、C. Otto ScharmerやU理論を初めて日本で紹介した中土井と国際的な共同研究を行っている。

このU理論は、もっぱら企業経営や企業人の研修のための基礎理論として、世界中で使われてきているが、学校教育に応用した研究はまだ世界には存在していない。

しかし、私は、このU理論が学校教育に応用可能であると考えている。なぜなら、このU理論は、一つ目は、学習者個人の変容にも学級や学校地域の変容にも援用可能な「普遍的な」理論であること、二つ目は、「深い学び」を大人にも子どもにもわかりやすい形で図示して示していること、三つ目は、個人や組織、地域が陥りやすい「問題」をどう乗り越えていけばいいかを示していること、などの理由があるからである。

4．U理論の詳細

U理論の左半分は、以下のような流れになっている。

（1）Downloading：自分の思考のいつもの物差しで見る
（2）Seeing：判断を保留し、現実を新鮮な眼で見る
（3）Sensing：場に結合し状況全体に注意を向ける
（4）Presencing：自分（組織）の無意識から見る

また右半分は、以下のような流れになっている。

（5）Crystallizing：結晶化
（6）Prototyping：実体化
（7）Performing：実践

今回の論考では、U理論の左半分、すなわち、「理解」の部分だけに焦点を当てて考察を行いたい。この左半分は、物事の「深い学び＝深い理解」を表現しているのであり、今回の論考のテーマに合致するからである。右半分は、学んだことを実際に「活用」するときの流れである。

U理論の左半分は、個人や組織の無意識におりていく道筋であり、右半分は、無意識に入ってつかみとった「本質」を、言語化し外側に表現していく道筋である。

U理論の左半分について詳しく考察する。

（1）Downloading：自分の思考のいつもの物差しで見る
（2）Seeing：判断を保留し、現実を新鮮な眼で見る
（3）Sensing：場に結合し状況全体に注意を向ける
（4）Presencing：自分（組織）の無意識から見る＝深い学び

（1）は、「浅い学び」の段階である。自分のいつもの思考パターン・枠組み・認識方法で物事を見ている段階である。新しい現象が起きたとしても、今までの思考パターンでその現象を捉えてしまい、本質が見えない段階である。自分が持っている知識が邪魔をする段階でもある。知識が多ければ多いほど、このDownloadingの段階に陥ることが多くなる。

子どもの場合、実はDownloadingの段階に留まることが少ない。かれらは常に新しい現象に出会って新しく変革しているからである。知識が増え人生が長くなればなるほど、Downloadingの段階に留まることが多くなる。

（2）は、Downloadingから離れて、物事をただ観察する（Seeing）段階である。このとき、自分自身が持つ知識や思考パターンから離れて、判断を保留し「ただ見る」ことになる。その現象を新鮮なものとして、眺めるのである。

（3）は、感じ取る（Sensing）段階である。その現象を眺めている間に、仏教で言う「物我一如（物我如一）」の状態となること、つまり、見ている私と見られている対象とが一体となる段階となることである。このとき、見ている私は、自分自身の殻をやぶり自分自身から離れ、見ている自分と見られている対象、そして、その状況とが一体となっていることを見ることになる。

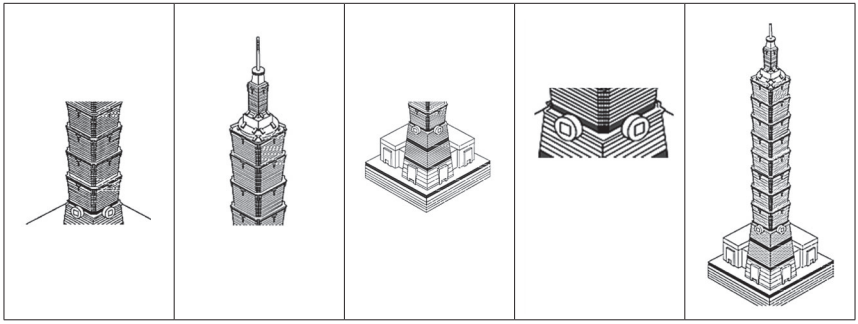
この段階は、日本の能楽において世阿弥が提唱した「離見の見」と言われるものである。「離見の見」とは、もともと能を舞う舞手自身が、離れたところから能を舞う自分自身を見ることである。メタ認知は、自分自身の内部で自分の認知を見ることであり、この「離見の見」と似ているが、「離れたところから見る」というところが大きく違っている。「感じ取る（Sensing）段階＝離見の見」の段階は、ただ自分の内部で自分の認知を見る（メタ認知する）のではなく、自分自身の振る舞いと自分が向き合っている対象とを合わせて、自分が離れたところから見ている段階である。

（4）は、自分の無意識と世界の本質とがつながった段階である。仏教で言う「梵我一如（梵我如一）」の段階である。U理論では、この段階を「未来からの出現」ということもある。自分の無意識と世界の本質とがつながっているということは、自分の無意識にある、自分自身が本当に行いたいことが、世界の本質に背いていないということであり、自分自身の天命（mission）を知るということでもある。だから、自分が本来あるべき未来を前もって感じ取って、その方向に自分自身を歩ませることができる、ということである。

この段階では、対象となる現象と見ている自分そして状況とを自分が見ている段階（Sensing）を経て、対象の本質と自分自身の無意識とが合一している。この段階に至ると、自分が次に何をするべきかが自分自身の無意識から湧き上がっているのである。そして、この、天命と繋がった自分の無意識の衝動が、次の表現の段階（U理論の右半分）へと向かわせるのである。

5．U理論で説明する実践例

ここまでのことを、読むことの学習とつなげて考えてみたい。例とするのは、鄭貴霖教諭（台北市立西門小学校）の説明文教材の実践である。この実践は、台湾・台北市立西門小学校5年生と日本・広島大学附属小学校4年生とで、同じ内容で行われた実践である。私は、両方の実践を観察し、日本での実践ではサポートも行った。この実践は同じ内容で行われ、同じ成果を上げたと考えられる。つまり、グローバルな観点から取り上げられうる実践であるといえ



る。

鄭教諭の実践は次のような内容である。

教材：翰林出版社5年生下、第一単元の「台湾風情」で台北101についての説明文である。当日は、文章を6つの形式段落に分け、ばらばらにしたものを使用している。（最後に資料として添付している）

内容：

〔予習〕（この部分は広島では行なっていない）

（1）本文を読んで、形式段落に番号をつけて、興味があるところを見つける。

〔当日の授業〕

（1）準備活動

① 文章のどこが面白いかを考える。

（2）発展活動

① 文と図を組み合わせる：バラバラになった六つの段落をよく読んで、ペアで、段落と101の図の組み合わせを考える。

② 段落をまとめる：バラバラになった六つの段落を改めて並べる。

③ クループで話し合う：クループで、段落の順番を話し合って、理由を説明する。

（3）総合活動

① 本時の学習内容をまとめる。

次に、この授業を、U理論を使って考察する。

〔予習〕について、台北では、前もって学習者は、この説明文全文を読んでいる。この段階では、学習者は、自分の知識や思考の枠組みで文章を読んでいると考えられる。したがって、この段階では、Downloadingの段階だといえる。広島では、この部分がなかったが、これは時間の関係で省いている。

また、〔当日の授業〕の（1）準備活動において、「どこが面白いかを考える」も、学習者は、自分の知識や思考の枠組みで文章を読んでいると考えられる。したがって、この段階でも、Downloadingの段階だといえる。

次に、（2）発展活動①「文と図を組み合わせる：バラバラになった六つの段落をよく読んで、ペアで、段落と101の図の組み合わせを考える」についてである。ここで使用された図は、教科書本文にあるものではなく、鄭教諭が自分自身でインターネットから探した図を加工した次の5枚の図である。

6つの段落に対して5枚の図であること、また、文章と図とが実

は完全には合っていないことから、学習者は、正解を探すために、文章をただ表面的に読んで図を当てはめていく「作業」ではすまないことがわかってくる。そうなると、学習者は、自分の思考の枠組みを捨て、文章と図とをしっかり見ようと試みることになる。したがって、この段階では、U理論のSeeing（「判断を保留し、現実を新鮮な眼で見る」）段階に入ったといえる。

次に、発展活動②「段落をまとめる：バラバラになった六つの段落を改めて並べる」③「クループで話し合う：クループで、段落の順番を話し合って、理由を説明する。」についてである。ここでは、6つの段落を一つの文章にすることが求められている。

しかし、元の文章は、最初と最後の各1段落が明確にわかるものであるのに対し、中の4段落は順序性に明確な基準がない。したがって、文章を根拠とすることができず、学習者は自分自身の中の「順序意識」を頼りに順番をつけることになる。

ただ、この「順序意識」は、学習者それぞれで異なっている。したがって、グループで順序を考えるときは、それぞれの「順序意識」がぶつかり合うことになる。これはまさしくSensing（「場に結合し状況全体に注意を向ける」）の段階だといえる。

鄭教諭の実践の発展活動②③は、対象となる現象（=⑥段落のばらばらの文章）と見ている自分、そして状況（=グループ、グループの各学習者の考え）の全てを、自分が離れたところから見て、結論を出さなければならない。これは先程述べた、Sensingの段階が、対象となる現象と見ている自分そして状況とを自分が見ている段階であるということの、一つの具体例であることを示している。

このように、鄭教諭の実践は、U理論の（1）Downloading（2）Seeing（3）Sensingの段階を経ていることがわかる。つまり、（3）のレベルまでの深い学びが行われているのである。このような深い学びが起こったのには、いくつか理由がある。

一つ目は、台北においても、広島においても、鄭教諭は、学級全体を温かい雰囲気で包んでいたことである。そのため、学習者は非常にリラックスして授業に望むことができた。

二つ目は、ただひとつの正解を求めなかったことである。図が5枚で段落が6個あること、図がそもそもこの説明文のものでないことなど、この授業は、唯一の正解を求めるようには作られていなかった。だから、学習者は簡単には考えることができず、文章を深く読み、自分自身の「順序意識」と向き合い、また、他の学習者の「順序意識」とも向き合うことになったのである。

三つ目は、鄭教諭が、Teacherではなく、Facilitatorに徹したことである。この実践では、鄭教諭は教えることはほとんどなかった。ただただ、学習者に活動の手順を伝え、学習者の意欲を喚起し、学習者を賞賛していた。このことにより、後で述べる、三つの「内なる邪魔をする声」を打ち消すことに成功したのである。

ここで、「内なる邪魔する声」について、述べる。U理論では、（1）Downloading（2）Seeing（3）Sensing（4）Presencingと深まっていくことの邪魔をする、自分自身の（あるいは組織内の）声があるとしている。それは、「冷ややかな判断の声」「皮肉な批判の声」「変化を恐れる不安の声」である。

「冷ややかな判断の声」とは、「今までこの考えでよかったのだ

から今回もこれでいいだろう」という声であり、Downloading の段階に止めようとするものである。「皮肉な批判の声」とは、「どうせ無理なのでやるだけ無駄である」という声であり、Seeing の段階からSensing の段階に降りさせないものである。「変化を恐れる不安の声」とは「変わってしまったら不安である」という声であり、Sensing の段階からPresencing の段階に降りさせないものである。

これらの「内なる邪魔する声」を打ち消すためには、自分自身の努力も必要だが、周囲からの支援も必要である。それが、Facilitator の役目であり、鄭教諭は、学習者に方向だけを示し、学習者の意欲を喚起し、学習者を賞賛していた。それにより、学習者は、勇気を持ち、「内なる邪魔する声」を打ち消して、学びを深くすることができたのである。

しかしながら、名教師の鄭教諭といえども、Presencing の段階に学習者を降りさせることは難しかった。この段階では、説明文というものの本質が学習者に深く学び取られている段階である。この段階に至らせるにはどうしたらいいかを考えてみたい。

Presencing の段階とは、学習者の無意識と世界の本質（この場合は、説明文の本質）とが「梵我一如（梵我如一）」の状態にあることである。そのためには、まず「人に対して説明する」ということがどういうことか、「相手がどうなることが説明できた状態なのか」を感じていなければならない。もっと言えば、この説明文を書いた人（筆者）がどのような思い（意図）で書いたかを感じ取らなければならない。

鄭教諭の実践では、段階を追いながら深いレベルまで降りることができた。その次には、「どのような順序が相手にとってわかりやすいか」と問いかけることで、読む人の立場で文章の順序を考えることができるようになっただろう。そうすることで、些末な文章表現ではないところへの注目もよりできるようになったと考えられる。

この「どのような順序が相手にとってわかりやすいか」は、読む人が変われば当然変わってくる問いである。この場合は、教科書教材であることを伝え、読む人が小学生（１０歳以上）であることを伝えると、より考えやすくなるだろう。

説明文の本質、説明する事の本質が読む人がわかるということ、また、読む人が筆者の思いを感じ取るようになるようにこの台北１０１の教材を通して学習者に考え至らせることができれば、「梵我一如（梵我如一）」の状態、つまり、Presencing の段階に至らせることができただろうと私は考える。

６．今後の課題

残された課題は、Ｕ理論の右半分である。鄭教諭の実践に即して言えば、台北１０１の説明文を読むことの学習を通して、説明文の本質、説明する事の本質に至ったとしたら、それをどう表現するか、どう活用するかということである。このことについては、今後の課題と考えたい。

（本論考は、２０１６年１０月に台湾・台北市立大学で行われた「第７回２０１６年儒学与語文学術検討会」で発表したものに手を

加えたものである。）

（参考文献）

オットー　シャーマー ,C.（2007）中土井僚訳（2010）『U理論』英治出版

中土井僚（2014）『U理論入門』PHP エディターズグループ

難波博孝（2008）『母語教育という思想』世界思想社

Otto Scharmer, C.（2016）Theory　U：Leading from the Future as It Emerges: The Social Technology of Presencing. Second Edition.

（広島大学）

（資料）

A　台北 101 における新年の様子はとても賑やかで、商売のチャンスをつかむだけではなく、全世界の注目も浴びる。年末のカウントダウンの時には、下から上に、一階一階ごとにライトアップされていく。現場にいる観客もテレビ前で見ている観客も、みんな一斉に大きい声でカウントダウンをして盛り上がり、全国的に、新年を祝う楽しい雰囲気に包まれる。また、いろいろな模様の花火が打ち上がり、火樹銀花（かじゅぎんか、中国の四字熟語で、「火樹」は灯りで赤く燃えるように見える樹のこと。「銀花」は銀白色の光のことで、灯りがきらびやかな様子）で、夜空に輝き、忘れられない光景となる。	B　このビルには、ファッション、美食、娯楽、文化交流などの施設がある。ビルには、「ギネスブック」に認定された世界最速のエレベータがあり、5 階から 89 階の展望台まで、なんと 37 秒で到達する。ビルの内部は大都会の縮図のように、大企業、世界で一番高いところにある郵便局、コンビニエンスストア、ショッピングモール、レストラン、フードコート、ジム、レジャー施設など、様々な施設があり、設備も新しく、多くの国内と海外の観光客が観光に来たり、ショッピングしたりしており、利益をもたらしている。	C　101 多節式の摩天ビルは台湾の新しいランドマークになった。このビルは文化の特徴を表すだけではなく、台湾の国際的な知名度も上げ、さらに国際金融の拠点にもなっているのである。	D　特別な行事がある日には、ビルの外壁にライトが照らされ、そこに行事のテーマとなる文字や図などが表示される。例えば、母の日の前日からは、カーネーションの模様が現れる。旧暦の新年には、上下逆さまの「春」（春が来るという意味）という文字が見える。どこかで災害、地震があった場合は、ビルの外壁に「台湾頑張れ」という文字がライトアップされて、被災者の人々を応援する。	E　ビルの外観は、四角の竹の節がイメージされている。8 階ごとに 1 ユニットとなっており、一階から一階に 8 ユニットも重なっている。竹の節が上に伸びていく節節高升（せつせつこうしょう、中国の四字熟語で、ぐんぐん伸びるという意味）という意味をこめているほか、台湾の各方面もますます発展できるように祈願するという意味もこめている。外壁には、中国の古い貨幣と如意（にょい、思いのままという意味）の形があり、どこも伝統的な飾り物が見える。台北 101 ビルのデザインには、伝統的な文化と科学技術が絡み合い融合しているというイメージが表現されている。	F　台北 101 は、台北市の信義計画区というところにあり、台北盆地の周囲の山々から見える。なぜ台北 101 は「101」と呼ばれるのだろうか？理由は簡単で、101 階あるからである。以前の名前は「台北国際金融センター」または「101 摩天(まてん)ビル」であった。「摩天」とは非常に高く、天に達するほど高いという意味である。この世界の注目を集める建築物は、どんな特徴があるのかについて、以下のように分けて説明する。